

道への

対談

陸上自衛隊初の特殊部隊の創設に携わり、退官後には三重県熊野の地に国際共生創成協会「熊野飛鳥むすびの里」を設立、日本精神の継承、真の日本人の育成に情熱を注いでいる荒谷 卓氏。日本の伝統文化や歴史、精神性に関する鋭い研究・評論活動を展開する麗澤大学准教授のジェイソン・モーガン氏。日本が直面する危機的状況を交え、お二人が語り合ういまこそ取り戻すべき日本人の生き方、そして日本復活への道筋とは――。



荒谷 卓

国際共生創成協会
熊野飛鳥むすびの里代表

あらや・たかし――昭和34年秋田県生まれ。東京理科大学卒業後、57年陸上自衛隊に入隊。陸上幕僚監部防衛部、防衛庁防衛政策局戦略研究室勤務の後、米国特殊作戦学校への留学を経て、帰国後に特殊作戦群初代群長となる。研究本部研究室長を最後に、平成20年退官。一等陸佐。21年明治神宮武道場「至誠館」館長に就任。30年国際共生創成協会熊野飛鳥むすびの里創設。農武学を通じて日本文化社会の国内外への普及活動に取り組んでいる。令和4年日本自治集団創設、代表に就任。著書に『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ！』『共に並木書房』『日本の戦闘者――現代のサムライは決してグローバリズムに屈せず』（ワニ・プラス）など。

熊野飛鳥むすびの里の「師霊武道場」にて

日本復活

日本精神をいかに取り戻すか

ジェイソン・モーガン

麗澤大学准教授

ジェイソン・モーガン——1977年アメリカ合衆国ルイジアナ州生まれ。テネシー大学チャタヌーガ校で歴史学を専攻後、名古屋外国語大学、名古屋大学大学院、中国昆明市の雲南大学に留学。ハワイ大学の大学院で東アジア学、特に中国史を研究。フルブライト研究者として早稲田大学大学院法務研究科で研究。2016年ウィスコンシン大学で博士号を取得。一般社団法人日本戦略研究フォーラム上席研究員を経て、2020年4月より現職。『私はなぜ靖国神社で頭を垂れるのか』『方丈社／公益財団法人アパ日本再興財団主催の第7回アパ日本再興大賞を受賞』『戦後80年の呪縛 日本を支配してきたアメリカの悪の正体』(徳間書店／共著)など著書多数。





対談は五月初旬、美しい山々に囲まれた神話の地・三重県熊野市飛鳥町にある国際共生創成協会「熊野飛鳥むすびの里」にて行われた。

熊野には日本人の生き方の原点がある

荒谷 きょうは、遠路はるばる熊野飛鳥むすびの里までお越しください、ありがとうございます。
モーガン こちらこそ、きょうはとても楽しみにしていました。

出版社の方の紹介で荒谷さんにご縁をいただいたのは、二〇二四年三月のことでしたね。長年武道もやっておられるし、日本の歴史や伝統文化、神道についてもとても深く理解しておられる。お付き合いをすればするほど、本当に立派な日本人だと尊敬しております。

荒谷 モーガンさんもアメリカ人でありながら、日本の伝統文化、精神性をとても深く理解してくださっています。いま日本から日本人らしい日本人がどんどんいなくなっている中で、モーガンさんの存在は本当に有り難いですよ。

モーガン 今回むすびの里にお招きいただいて、日本について改めていろんなことを感じました。

三重県は何度か訪れたことがありますが、こんなに山奥まで来たのは初めてです。これほど深い山の近くで生活していれば、自然の力、神々の存在を感じずにはいられないでしょうし、信仰を持たざるを得ないだろうと思いました。ここには日本人の信仰心、生き方の原点があるように感じます。

私が初めて日本に来たのは二十六年前、二十一歳の時でした。アメリカの大学で知り合った日本人の友人の勧めで岐阜県のご家庭にホームステイしたのです。そこも熊野のような豊かな自然に囲まれた地域で、山に入っていくと神社がひっそり建っているんですね。豊かな自然、神々と共に、威張らず謙虚に生きる日本人の生き方に私はすごく惹かれ、日本と永遠

に関わりた、もっと日本について学びたいと思い、日本の歴史や文化を研究するようになったんです。他の国とは全然違う聖なる場所、これが日本の最初の印象であり、いまもそれは変わりません。

私も仕事をリタイアしたら、山があつて、川があつて、鳥の囀りが聴こえてくる、むすびの里のような土地で暮らすのが理想です。熊が出るのは怖いですが(笑)。

荒谷 そう言っていたら、本当に行きたいですね。私も都会に行くと日本的な感覚が鈍っていく実感があつて、都会で日本の伝統文化や信仰についてお話をする機会があつても、どこか空虚というか、言葉だけで語っている感じがするんです。でも熊野のような場所では、言葉であまり語る必要がないんです。モーガンさんがおっしゃったように、日本というものを心と体で感じる事ができる。まあ、しかし、そうした場所は日本から随分少なくなりました。

見えない力に導かれ、熊野の地へ

モーガン そもそも、荒谷さんはどんなきっかけでこの熊野にむす

びの里をつくられたのですか。

荒谷 私は大学卒業後に自衛隊に入隊し、陸上自衛隊で初となる特殊部隊(特殊作戦群)の創設に力を尽くしました。しかしアメリカがつくった戦後体制から生まれた自衛隊の中には、どんなに頑張っても戦後体制を変えることはできないと痛感しましたね。戦後体制を打破し、日本を自主独立した国として復活させるには、私たち日本人一人ひとりが、日本文化そのものになって生きられる伝統的共同体をつくらなくてはだめだと考えるようになったんです。

時間を見つけては、共同体を実現できる場所を求め、当時自宅のあった東京から足を延ばせる関東一円を見て回りました。でも素晴らしい土地はたくさんあるのですがどこか日本を感じない、日本の神々の存在を感じないんです。

モーガン 「ここだ!」という場所が見つからなかったのですか。

荒谷 そして二〇〇八年、四十八歳で自衛官を退官してからは、明治神宮の武道場・至誠館館長として奉職し、いよいよ共同体づくりを急がなければと思っていた時でした。インターネットで検索して、

たまたま出てきたのがこの場所だったんです。

むすびの里をつくる前は、「四季の里」という施設があったのですが、よく調べると、食堂も宿泊所も武道場もついている。これは高度経済成長期につくって失敗した施設か何かかなと思いつつ、持ち主に電話をしたところ、奥様が出られて、「お父さんはこの施設を青少年の健全育成のために建てたので、その思いを引き継いでくれる人でないと売らないんです」と。そこで、直接会って話してみようと、熊野に伺いました。施設の持ち主は吉野熊野新聞の社長さん（故人）だったのですが、あつという間に意気投合しました。とんとん拍子に話が進みました。

モーガン 不思議な出逢いですね。荒谷 その後「四季の里」に案内していただいたのですが、二十年ほど使用していなかったため、建物はぼろぼろでした。ただ、周囲には昔ながらの集落共同体が生きており、山々には日本の神々がいるような気配がして、「ここは自分が求めていた土地だ」と、瞬間的に感じるものがありました。

実際、至誠館の職を辞し、二〇

一八年、五十九歳の時に熊野に移住してから、ここがどういう場所なのか詳しく分かっていきました。近くには『日本書紀』に紹介されている伊弉冉尊の御陵「花の窟神社」や、神武東征における最終上陸地「荒坂の津」があり、そこで武甕槌神の剣「劔霊」が地上に降ろされました。まさに来るべきところに来たなと確信しました。

集落の方々も、お土産を手には挨拶に伺ったら、「知らない人間からそんなものはもらえん」と受け取ってくれない（笑）。でも、逆にそういうところが昔ながらの日本人の共同体だという感じがしまして、すっかり気に入りました。

「農・武・学」を通じて 真の日本人を育成する

モーガン 共同体づくりはどのように進めていかれたのですか。

荒谷 むすびの里を開設したのは二〇一八年十一月一日でした。

まずは生い茂った草木を切ったり、払ったりするところから始まりました。すると、集落の長老たちがチェーンソーを担いでやってきて、裏山の杉や檜をばんばん切り出すんですよ。建物の周りに木

があると思いがきてだめだと。

長老たちは皆生きるための知恵と経験の宝庫で体力も抜群、いまでは私の人生のお師匠ですよ。

他にも、側溝にぎっしり詰まった竹の根を取り除いたり、埋没していた池の泥を汲み出したりしながら、いまのむすびの里の形を少しずつ整えていきました。日々の労働で体はガタガタでしたが、自然への畏怖を感じ、土地の生命と一体になる感覚がありました。モーガン 日本の伝統的な共同体のあり方、日本人の生き方を実際に体験していったわけですね。荒谷 現在むすびの里では主に次の三つの柱で活動しています。

一つには農業、米づくりです。長老たちに教えていただきながら、まず一反分の田んぼを借りるところから米づくりを始めました。そ

の後年を追うごとに集落の耕作放棄地を引き受けていき、いまでは一町五反分まで広がっています。

毎年、田植えや収穫の時期には、集落の方や市内外の仲間手伝ってもらっているのですが、自立した「農」「食」の生活基盤を築くことは、日本を取り戻すことと言っても過言ではないと思います。

日本神話の三大御神勅の一つ「斎庭の稲穂の神勅」では、「稲穂を以て葦原の中つ国（現世・日本）を高天原（譬えれば天国・極楽浄土）のように豊かで平安な国にせよ」とあります。他律的あるいは死後の救済にすぎるのはなく、自分たちの力でこの世を天国のようにしようとする日本人のあるべき姿を示しております。

また国家の統治を「食國しろしめす」というように、人々の食を確か豊かにすることが国を治めることの基本であると御歴代天皇が繰り返して召しております。日本人にとっての稲作は、個人の収益事業としての農業ではなく、共同体の生命活動、和を育む実践教育の場、先祖から受け継ぎ子孫に伝え残す文化伝統、自然との共生の実践の場としての「農」なのです。



「劔霊武道場」での武道教室の様子



日本にホームステイしていた頃のモーガン氏。
この日本との出逢いが氏の人生に大きな影響を与えた

ですから、「農」を通じてこのような価値観を共有できる人を一人でも多く増やしていく。それが日本の伝統的共同体、生き方を取り戻す道だとの思いがあるんです。モーガン 稲作を通じた共同生活が、日本文化の原点にあると。

荒谷 二つには「武」です。私は学生の頃から剣術の鹿島神流や合気道など武道をずっと続けてきたのですが、特にいまのような人心が荒廃した時代においては、武の鍛錬によって自分が率先して日本共同体を守るという勇氣、強さを育てることが必要だと思うんですよ。いわゆる「荒魂」です。日本の和の精神「和魂」とそれを守りぬく「荒魂」は不岐の関係にありますからね。その強さを育てるため、薙道場を整備し、「荒谷流武道教室」を開催しています。そして三つには「学」です。現代の日本社会では、普通に生活し

ているだけだと、日本の正しい歴史も伝統文化も何も分からなくなってしまうからね。日本とはどういう国なのか、日本人としてのどのように生きればいいのか、ある程度の知識を得るために、定期的な勉強会を主宰しています。

むすびの里という共同体の中で生活し、「農・武・学」を日々実践していくことにより、日本人としての自覚を高め、真の日本人が育っていく。これがむすびの里をつかった目的であり使命です。

いまでは、私の取り組みに共感して、時間を見つけてはむすびの里の活動を手伝ってくれる仲間が五百人以上に増えました。また仲間以外にも、海外含め年間千人以上の方々にお越しいただいています。本当に有り難いことです。

日本を訪れる人々が 求めているもの

モーガン 荒谷さんがむすびの里で実践されているように、自然と共生していたかつての日本人にとって神々の世界、神道の世界というのは、身近な存在として生活の中に当たり前にあったのです。「お天道様が見ている」という言

葉もありますけれども、神々を生活の中で感じているからこそ、日本人は常に謙虚で世界が驚くような他人への気遣い、おもてなしができるのだと私は思うんです。

私が荒谷さんにお会いして一番心惹かれたのは、武道でも歴史への知識でもなく、日本の伝統的な信仰心なんです。荒谷さんとお付き合いをして、神道に基づく確固とした信仰心をお持ちだと分かった時、「ああ、この男から日本の再生は始まる」と思いました。

やはりどんな国、民族の再生もその土台に信仰心、魂がなければ始まりません。だから、日本の伝統的な信仰心、神道の精神を甦らせることなしには、日本国の甦りもないだろうと思うんですね。

荒谷 先ほど都会で日本の伝統文化や神々について話をしても、どこか空虚に感じてしまうと言いましたが、ここの集落の方々は神道について専門的なことはご存じなくても、毎朝山の神様に手を合わせて一日を始めるんです。知識ではない「生きた神道」がここにはあります。それこそ、いまの日本人が取り戻し、大切にしなければならぬ生き方だと思います。

モーガン また、荒谷さんがお書きになった論文の中に、「穢れ」は「気が枯れる」に由来しているとあって、大変勉強になりました。つまり古来日本人にとっては、宇宙の基盤となる「気」、精神的なエネルギーから乖離してしまったところは穢れた場所であると。

このことを知ってから、私は日本人だけではなく、人間は熊野のような神々を感じる土地で生活しない限り、精神的に生まれ変わることはできないといえますか、よりよく生きることはできないのかなと考えるようになりました。

事実、最近、特に欧米からの観光客が日本にたくさん来ているではないですか。確かにブランドを買いに来ている人もいるとは思いますが、その多くが地方の神社やお寺を見て回っているんですよ。彼らは自分の国にはない何か、おそらく日本に残っている「聖なるもの」を無意識的に探しに来ているのではないかと思うんです。

荒谷 私もそう思いますね。

モーガン なぜなら、いま自由とか人権とか個人主義とか、西洋で五百年発展してきたイデオロギーが完全に行き詰まってしまってい

るからです。例えば「我思う、故に我あり」で有名なデカルトの哲学のように、西洋では自我（私）が宇宙の中心にあり、自我からすべてが始まりますが、それではお互いに自分を主張して争いが絶えないわけです。しかし、日本に來るとそれが全く逆なんです。

西洋人と違って、日本人はごく自然に周りの人や状況を慮った上で自分の言動を決めています。つまり、自我がまずあるのではなく、周囲との関係性の中から自我がつけられていくような感覚です。

西洋的な生き方が完全に行き詰まってしまった、じゃあどうするのか？ 日本の伝統文化、神道には西洋とは違う価値観、生き方があるのではないか。その思いが意識的にせよ、無意識的にせよ、日本を訪れる西洋人の中にあることを私は強く感じているんです。

荒谷 むすびの里にも、多くの外国人が日本の武道を学びにやってきました。世界には様々な格闘技がありますから、技術だけに関心があるのならわざわざ日本の武道を学ぶ必要はありません。では、なぜあえて日本武道を学びに来るかというと、要は、日本武道にある

精神性を探求したいわけです。稽古の時にいつも伝えているのですが、武道では刀を振るにしろ、日本人としての心身をつくるための文化的鍛錬なんだよ。日本人は伝統的に、下腹にある「丹田」に意識と呼吸を集中させて身体を動かしてきました。刀も腕の筋肉を使って振ろうとすれば動きがバラバラになります。丹田の力を使うことで体全体が統一して動くようになっていくんです。

そして日本には、「腹を決める」などの言葉があるように、腹（丹田）を鍛えることがその人の生き方、精神性に表れてくる。つまり、体の鍛錬と精神の成長が一体になっているのが日本武道であり、日本文化だと言えます。

モーガン 興味深いお話です。

荒谷 またむすびの里の武道教室では、稽古が始まる時と終わる時に必ず正座をして神棚に礼をします。格闘技と異なり、参加者の真摯な稽古を神々に奉納するのが日本武道の精神です。だから、日本の武道場には必ず神棚がある。

ところが、最近は神棚がない武道場が結構増えていて、指導者の方々もそのことに何の疑問も持た

ないわけです。丹田の鍛錬と精神の関係をきちんと説明できる指導者も少なくなっています。それではわざわざ日本まで武道を学びに来た外国人もがっかりですよ。

日本の「形」を消し去ったアメリカの占領政策

モーガン 神棚がない武道場が増えていくというのは本当に驚きました。日本の先人たちが培ってきた精神性が、どんどん失われていくことを改めて実感します。

荒谷 武道もそうですが、日本の精神文化というのは「形（フォーム）」とセットになっているんですよ。だから、戦後アメリカのGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）が日本を占領して何をしたらかというと、例えば爆撃で焼け野原にした土地にアパートをいっぱい建てました。

そうすると、アパートの部屋には神棚を祀ることができませんから、それが二代、三代と続くうちに神様やご先祖様を敬うという形、生活習慣がなくなっていくわけです。いま神棚をきちんと置いている家はほとんどないでしょう。

モーガン GHQは日本の形文化

の重要性をきちんと見抜いた上で、占領政策を行ったわけですね。

荒谷 日本の伝統的な家屋では、家の神様であり中心でもある大黒柱（心柱）をまず建てるんです。父親のことを「一家の大黒柱」と呼ぶように、大黒柱を中心とした家の構造（形）が父親の存在、日本人の家族のあり方に大きな影響を与えてきました。ところが、戦後の建築基準法で四メートル以上の木材の使用を建築基準法違反としたために、少なくとも五メートルは必要で大黒柱が使用できなくなり、日本の家屋はほとんど壁柱の構造になってしまいました。

要は日本の伝統的な家屋がなくなっただけでなく、大黒柱のない「芯なし」構造になったことで、日本の家族のあり方、文化の根幹部分が変質していったのです。いま父親の権威がどんなに弱くなっていると言われていますが、それでも、それはアメリカの占領政策により家の構造が変えられたことも影響していると思います。

それから、「家の文化」である日本では、家を存続させるために家督相続を行うのが当たり前でした。しかし、戦後は個人相続に変えら

れてしまい、先祖代々の立派な家や土地を売却して、子供たちそれぞれに分けなければならなくなりました。こうして日本の家文化はなくなつて、後には、先祖代々の家や土地から切り離された個人だけが残つたというわけです。

他にも神道指令、武道の禁止など、アメリカが日本の伝統文化、精神性を消し去るために行ったことは、調べればいくらでも出てきますよ。しかも二度と日本がアメリカに歯向かつてこないよう、かなり緻密に考えてやっている。

モーガン アメリカは自由と民主主義、正義の素晴らしい国であり、日本を守るためには日米同盟が大事だなどという人たちが、「親米保守」ならぬ「拝米保守」が日本にはたくさんいます。しかしアメリカ人としてあえて言わせていただくと、日本人はアメリカ・ワシントン政府がどれだけ腹黒いか、分かっているように思います。

荒谷さんがアメリカの占領政策についておっしゃったことは、アメリカがインディアンに対して行ったことと同じなんですね。もともアメリカ大陸にはインディアンたちが住んでいましたが、入植



「農・武・学」を日々実践していくことで、真の日本人が育っていく。これがむすびの里の使命です」

してきたヨーロッパ人は強制移住政策や虐殺を通じて彼らの文化、言語や精神を巧妙に奪い取り消し去っていききました。アメリカ・ワシントン政府は他の民族の精神を消していくのが本当に上手なんです。日本の占領政策に関しても、インディアンの中の経験をよく生かしたのではないかと思います。いま皇室の皇位継承問題が話題になっていますが、これも元を辿れば、アメリカの占領政策に行き着きます。私は、アメリカ・ワシントンは日本人の精神性をなくすために、あえて皇室を残したのだと考えているんです。

つまりアメリカは天皇に人間宣言をさせ、徐々に日本人の皇室への崇敬の念を薄れさせ、日本の歴史と文化、精神的支柱である皇室が自然になくなっていくよう仕向けたんですよ。まるで真綿で首を

絞めていくように。いまだそのアメリカの腹黒さ、ずる賢さに気づかない日本人は人がすぎます。

荒谷 ええ、皇統の危機が騒がれているのは、そもそもアメリカの占領軍が宮家への歳費を打ち切ったり、特権を剥奪したりする指令を出して、皇族の方々が皇籍から離脱しなければいけない環境をつくったからです。いまも元皇族の方はたくさんいらっしゃるわけですが、その方々に皇籍に復帰していただければ何の問題もないことです。歴史を紐解くと、継体天皇のように五代遡って皇位を継承した事例などもあるわけですからね。

モーガンさんがおっしゃったように、このまま日本の文化的、精神的な支柱である皇室が自然消滅していくようなことになれば、日本^{ばん}の再生も不可能になります。万^{ばん}世^{せい}一^{いつ}系の皇統は日本人自身が何と

しても守らなければなりません。

日本を侵食する

グローバリズムに対抗せよ

荒谷 日本を守るために、もう一つ私たちが知っておかなくてはならないのは、主に欧米の一部エリートが主張し、推進しているグローバリズムの危険性です。これは個人の自由・平等・人権、経済、金融の自由化など、共通のルールのもとに国境を越えて世界を一つにしていこうという思想です。

一見、世界が一つになるのはよいことのように思われるかもしれませんが。しかし、彼らが主張するグローバリズムとは、それぞれの国の独自の伝統文化や信仰に基づき生き方を否定して、「グローバル・スタンダード」に統一しようということです。自由・平等・人権といった美辞麗句は方便に過ぎません。その最終目的は、一部エリートたちの都合のいいルールを押しつけて、人々を効率よく管理することだと思っています。

モーガン グローバリズムの危険性については、全く同感です。日本人はグローバリズムの本質に早く気づかなければなりません。

荒谷 日本では国際標準、欧米の価値観に合わせなければいけないと、左翼のみならず保守と称されるリーダーや知識人までがグローバリゼーションを歓迎してきました。結果、日本人の伝統的な価値観や共同体の破壊がどんどん進んでいるのが現状ですよ。だから私は日本を守るためにも、グローバリズムとは徹底して戦います。

モーガン グローバル・スタンダードなるものを押しつけ、それぞれの国の文化や伝統を消し去っていくグローバリズムは、まさに全体主義そのものです。

私はグローバリズムとは反対に、それぞれ文化的背景があるからこそ、お互いに深く理解し合うことができると思っています。私が生まれ育ったアメリカ南部のルイジアナ州の田舎には、いろんな人種の人々が住んでいましたけれども、お互いの文化に興味を持ち、リスペクトし合っていました。

また、日本にホームステイした時のことも忘れられません。受け入れてくださった岐阜県のご家庭のお母さんが、最初から私を自分の息子のように温かく受け入れてくれたんです。そして当時の私の

日本語能力はほぼゼロでしたが、お母さんの言っていることは不思議と100%理解できたんですね。それはお母さんが他人を慮る「日本の心」を持っていたからで、私もまたアメリカ南部の田舎で育ったという文化的背景を持っていたからこそのできたのだと思います。

まさに理想とする人間同士の心の交流がそこにはありました。

荒谷 素晴らしい体験ですね。

モーガン そのように異なる歴史や文化を持つていくことが、むしろお互いの壁を超えていく力、理解し合っていく力になるんです。だから私も荒谷さんと同じくグローバリズムには断固反対です。

日本が置かれている現実 気づくことから始まる

モーガン グローバリズムの支配を脱して、日本を自主独立した国

にするためには、やはり日本人の幸せを第一に考える「日本ファースト」の強いリーダーが現れることが必要だと思います。日本のリーダーは日本のことを第一に考えると、右翼だとか、戦前の軍国主義の復活だとか、批判されることを恐れているように感じます。

でもそれを恐れているのは、いつまで経っても日本は独立国にはなれません。とにかくこれからのリーダーは日本のことを第一に考えて、伝統文化、信仰心、先人たちの名譽、自虐史観ではない本当の日本史を取り戻し、一日も早く戦後という日本史上最も恥すべき時代に終止符を打つべきですよ。

荒谷 戦後は一貫して伝統文化はだめ、武道もだめ、軍事もだめというように、GHQの占領政策が有効に作用し、日本は唯一残された経済、あるいはスポーツの分野

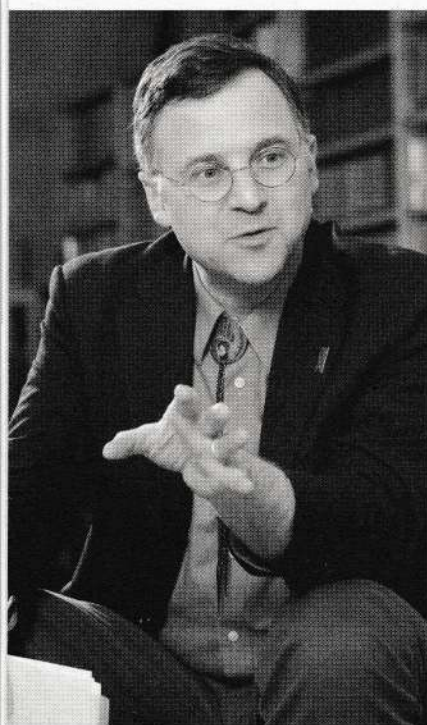
で頑張ってきたわけですね。

ところが、特に東西冷戦が終わって以降、日本の経済発展に脅威を感じたアメリカは、市場の自由化を求めるなどして、日本人が働いても働いても富が海外の企業や投資家に持って行かれるような仕組みをつくりました。だからいまの若者たちはお金がなくて人生計画もつけれない、志を持って働くこともできなくなっています。

モーガン ええ、日本人はどんどん貧しくさせられていますね。

荒谷 戦後の占領政策やグローバリゼーションの問題も含め、まずそうした日本の置かれている現実を客観的に認識しなければ、何をどうすればいいのか、手の打ちようがないし、スタートラインにも立てないと思うんです。現代の秩序を十分咀嚼した上で、反省と温故知新の実行力を持って、日本のみならず人類の発展向上に貢献することが大事だと思います。何しろ日本人は国家として世界最長の経験を持っていますから。

米軍占領下に日本人からその歴史的叡智を消し去ろうとしたわけですが、ならば逆に当時GHQが禁止・検閲した書籍や映画・漫画



「日本の伝統的な信仰心、神道の精神を甦らせることなしには、日本国の甦りもないだろうと思います」
森田 哲郎

熊野飛鳥むすびの里にある、日本の神話や武士道、歴史から近現代の思想・哲学書までを揃えた図書室兼修学教室「士卒復覚(しそつふっかく)塾」にて



の内容に、もう一度注目すればいいんですよ。そうしたのを見れば、GHQが日本からなくそうとしたものが何だったのかよく分かりますし、日本の先人はこういう価値観、精神性を持って生きていたんだと、自らの生き方を顧みるきっかけになるはずですよ。

手を合わせる心が 日本復活への礎となる

モーガン それに関して、私がアメリカ人として日本の方々に伝えたいのは、いまの日本人には先人が持っていた精神的、身体的なタフさ、忍耐力がなくなってしまうているということです。先日見た禅のテレビ番組では、禅僧の方が

真冬の早朝に起き、冷たい水を被り暖房のない部屋で修行してました。ホームステイ先のお母さんも辛いことがあっても、それを決して周りに見せませんでした。

神道や武道、禅、修験道にしても、日本には厳しい状況に身を置いて修養する、自らを律して鍛えるという文化があったと思うんです。私もルイジアナの田舎で、親から薪割りや石運びなど随分理不尽な仕事をさせられましたが、それによって困難に負けない心と体が養われたと感謝しています。

今回のテーマである「一念の微」も、日々の忍耐と修養の積み重ねによって培われていくものだと思うんです。また、強い肉体と精神力がなければ、自らの一念を実現していくこともできません。

ところが、いまの日本の若い人たちは、どこにいてもスマートフォンでゲームやSNSをやっていますし、少し暑ければ持ち運びができる小さな扇風機をずっと顔に当てています(笑)。このような状況では、未来の日本を背負っていく心身共に鍛えられたリーダーは現れてこないと思います。

だから日本人の信仰心、相手を

思いやる和の精神と共に、自らの心身を鍛えていく修養文化を取り戻していくことが、この困難な時代を乗り越え、日本のよりよい未来を取り戻していく大きな力になっていく。そう信じています。

荒谷 私も、日本の伝統文化や信仰心を大事にしましょうと言いながら、肝心の自分のご先祖様を敬うことを疎かにしていました。

それである時、これではいけないと、「荒谷家先祖代々之霊」と木板に書いて、毎朝必ず拝むようになったのですが、これがすごくよかったです。神話の神様には会ったことはなくても、ご先祖様の霊は一番身近な存在ですから拝むにも気持ちが入るんです。

実は、私は息子を二十六歳の若さで亡くしてしまっていて……。息子の霊にも毎朝手を合わせて話しかけるようにしてきました。そうすると、生前の思い出が甦ってきて、本当に体と体が触れ合っているような感覚になるんですね。

そして最後は「生かしていただいてありがとうございます」「お守りいただいてありがとうございます」「きょう一日全力で頑張ります」と唱えて一日を始めるのですが、

私を育ててくれた祖父母、お父さん、お母さん、先に逝ってしまった息子のために、どんな苦しいことでも頑張ろう、持てる力を振り絞ろうという生きる力と感謝の念が溢れてくるんです。

モーガン ご先祖様に手を合わせ、大切にすることが荒谷さんの生きる力に繋がっているのです。

荒谷 神々、ご先祖様に手を合わせ、よききょう一日全力で頑張ろうという気持ちで日々を一所懸命生きる。それが日本人が大事にしてきた生き方、「一念の微」であり、この国を守っていく大きな礎になるのではないかと思います。

これからも、むすびの里の活動を通じて、自然と共に生き、神々やご先祖様に手を合わせて感謝する心、毎日一所懸命生きる大切さを一人でも多くの人に伝えていくことで、日本を守り再生させていく真の日本人を育てていきたい。それがいまの私の一念ですね。

モーガンさん、きょうは貴重な時間をありがとうございました。モーガン こちらこそ素晴らしい機会をありがとうございました。これからも日本復活のために力を合わせて闘っていきましょう。